

# 2019 年度 学費平均額

初年度納入金平均額は、  
公立大理系と私立大のほとんどの学部系統でアップ

旺文社 教育情報センター 2019 年 10 月 1 日

2019 年、5 月より元号も変わり、本日より、消費税率も引き上げられた。世の中は常に大きく揺れ動いている。当然ながら、学費もそうした影響を受ける。

志望校を選ぶとき、学費の問題というのは、どうしても避けて通れない。大学受験はもちろん重要な転機ではあるが、長い人生の一通過点。その先、どんなふう生きていくか、ある程度想定しておくことは必要だ。そのためにも、大学進学にかかる費用は知っておきたい。世の中の動きを反映する学費を、しっかりと捉えたいところだ。

しかし、各大学の学費を見ても、それが高いのか、低いかわかりづらい。そこで、だいたいの平均額を理解しておくことが重要になってくる。

実は、一口に大学の学費と言っても、国公立大別でその金額は大きく異なっている。私立大は大学によってさまざま、公立大は同じ大学の中でも地元出身かどうかで別々の金額が設定されていることが多い。

旺文社では進学情報誌『螢雪時代 8 月臨時増刊』(7 月 13 日発売)において全国の大学を対象に調査を行い、本年度(2019 年度)の学部系統別の初年度納入金平均額を算出した。これらを参考に、早い段階で志望校のおおまかな学費を想定しておこう。

## 【初年度納入金とは…】

入学金や授業料、施設費、実習費、諸会費等、1 年次に支払う学費全体のこと。

## ●国立大はどこでもほぼ同額。ただし、今後に注目！

国立大に関しては、入学金と授業料は文部科学省の決めた標準額の 20%増を限度に、各大学が決定することになっている。2019 年度の国立大は、一部を除き、どの大学・学部も文系・理系を問わず、次ページに掲載した標準額のとおり設定している。

注目すべきは、2019 年度入学者から、授業料について、東京藝術大が 642,960 円に、東京工業大が 635,400 円に変更したことだ。これまで、国立大はどこも標準額どおりに学費を定めるのが慣例となっていたが、それを変更する大学が出てきている。さらに、この流れはとどまるところを知らず、2020 年度には千葉大学と一橋大学が授業料の値上げを予定している。今後も、国立大学の動きから目が離せない。

## 文部科学省で定める2019年度の「標準額」

【昼間部】	入学金	282,000円
	授業料	535,800円
	初年度納入金	817,800円 (入学金と授業料の合計金額)
【夜間部】	入学金	141,000円
	授業料	267,900円
	初年度納入金	408,900円 (入学金と授業料の合計金額)

※基本的に必要な学費は入学金と授業料だが、そのほかに学生会費・学会費、学生教育研究災害傷害保険料などが任意徴収される。芸術系では、実習費が必要な場合もある。

### ●公立大は地域内か地域外か、私立大は学部系統で大きく異なる

#### 公立・私立大 学部系統別 初年度納入金平均額(円)

学部系統	公立大 地域内			公立大 地域外			私立大		
	入学金	授業料	初年度納入金	入学金	授業料	初年度納入金	入学金	授業料	初年度納入金
文学部	208,415 ↓	522,365 ↓	771,842 ↓	340,800 ↓	520,872 ↓	906,779 ↓	231,110 ↓	780,117	1,299,956
外国語学部	196,250 ↓	505,200 ↓	771,503 ↓	344,335 ↓	503,400 ↓	921,635 ↓	231,340 ↓	764,427	1,295,392
人文・教養・人間科学部	214,321 ↓	517,034	793,238 ↓	359,811 ↓	515,644	942,503 ↓	230,776 ↓	789,133	1,305,959
教育・教員養成系学部	224,867 ↓	537,378	805,603 ↓	365,750 ↓	537,575	951,521 ↓	236,176 ↓	786,266	1,347,947
法学部	189,731	533,492	786,735	351,367	533,300	950,697	222,033 ↓	755,230	1,234,607
経済・経営・商学部	211,550 ↓	541,244	812,080 ↓	365,800 ↓	541,565	968,717 ↓	226,217 ↓	761,186	1,264,226
社会・社会福祉学部	210,905 ↓	539,363 ↓	801,219 ↓	352,492 ↓	539,459 ↓	944,828 ↓	232,962 ↓	779,143	1,304,865
国際関係学部	219,296	544,074	833,099	371,654 ↓	544,392	990,201	226,839	808,856	1,320,850
理学部	219,712	535,728	805,729	359,367	535,725	949,365	235,625 ↓	1,003,524	1,567,757
工学部	220,161	533,721	806,197	359,172	533,606	947,870	238,973	1,039,019	1,609,120
農・獣医畜産・水産学部	241,836	535,800	820,817	382,218	535,800	961,199	247,671	953,096	1,628,425 ↓
医学部	250,625	540,450	934,841	555,571	541,114	1,239,561	1,329,032	2,691,774	7,284,392
歯学部	282,000	535,800	833,400	520,000	535,800	1,071,400	600,000	3,207,647	5,477,765
薬学部	194,833 ↓	535,800	855,778	363,867	535,800	1,024,811	327,286	1,405,803	2,155,359
看護・医療・栄養学部	226,003	537,133	831,442	384,262 ↓	537,215	989,904	264,340	970,441	1,701,389
家政・生活科学部	209,217 ↓	537,339 ↓	815,551 ↓	381,800 ↓	537,339 ↓	988,133 ↓	240,034 ↓	791,631	1,384,057
体育・健康科学部	206,167 ↓	564,200	785,253 ↓	355,933 ↓	564,200	935,020 ↓	243,015	815,264	1,409,811
芸術学部	232,542	537,017	827,924	390,009	537,127	984,930	237,147 ↓	1,003,358	1,624,397

※夜間を含む。

※公立大で地域内・外の区分がないところは地域内に含む。

※入学金と授業料は内訳として表示。そのほか実習費等を合計したものが初年度納入金となる。

※大学によって別途徴収する後援会費等は含まれていない。

※一部、2020年度予定金額も含む。

公立大は、授業料に関しては、大半が国立大と同じに設定している。入学金は大学ごとに幅広く、地元出身者には低く設定しているところが多い。上の表の「地域内」が地元出身者を対象にした金額、「地域外」がそれ以外を表しているが、同学部系統での地域内・外の差は13万～17万円程度あり、医・歯学部系統のみ、差が大きくなっている。

一方、私立大では、大学・学部などによってさまざまだ。特に、学部系統によって大きく異なっており、初年度納入金平均額がもっとも低い法学部ともっとも高い医学部では、約605万円もの差がある。平均額は、高い順に「医→歯→薬→看護・医療・栄養→農・獣医畜産・水産→芸術→工・理→体育・家政→文系学部（※）」となっている。学費の高い系統は主に、実験や実習があること、そのための専用の施設が必要であること、また、芸術系統などでは少人数や個別の指導が行われることなどが影響している。

### ●公立大の初年度納入金平均額は、文系でダウン・理系でアップ

次に、公立大・私立大それぞれに関して、平均額の昨年比を見てみよう。前ページの表で、下向きの矢印が昨年比ダウンを示している（1,000円以上のダウンのみ矢印を掲載）。

公立大では、地域内・外ともに入学金ダウンの学部系統が多い。入学金、授業料ともにダウンで、初年度納入金もダウンしているのが、文、外国語、人文・教養・人間科学、経済・経営・商、社会・社会福祉、家政・生活科学部の地域内・外。なかでも文・外国語学部の地域内・外で大幅減となった。また、教育・教員養成系学部と体育・健康科学部では、地域内・外ともに授業料はアップしたものの入学金ダウンで、初年度納入金は大幅にダウンした。

一方、法学部の地域内では入学金・授業料ともにアップで初年度納入金もアップした。そのほか、法学部の地域外と、国際関係、理、農・獣医畜産・水産、医、歯、看護・医療・栄養学部の地域内・外でも初年度納入金アップ。入学金・授業料が昨年同かほぼ同じ、あるいは入学金ダウンであっても、一部の大学が実習費等を増額したことで、結果的に、初年度納入金はアップとなった。同様に、薬学部についても、地域内では入学金がダウンしたものの、初年度納入金は地域内・外ともにアップした。

ここで、改めて公立大の初年度納入金全体を見てみると、アップとダウンは半々といったところ。しかし、よく見てみると、文系・理系の学部系統（※）で傾向が異なっている。文系では、法学部と国際学部を除く全学部系統で初年度納入金がダウンしているのに対して、工学部は小幅ではあるものの、理系ではすべての学部系統でアップしていることがわかる。

私立大では、多くの学部系統で入学金ダウンの一方、授業料はアップとなり、初年度納入金アップとなった。国際関係、工、薬、体育・健康科学部については、授業料アップに加えて入学金もややアップし、こちらも初年度納入金アップとなっている。医・歯学部は入学金・授業料は昨年同だが、一部の大学における実習費等の増額により、初年度納入金はアップしている。

農・獣医畜産・水産学部のみ、ほかとは異なる傾向を示しており、入学金はややアップしたものの、授業料がややダウン。一部の大学が実習費等を減額したことも影響し、結果的に、全学部系統のなかで唯一、初年度納入金ダウンとなった。

※

文系＝文学部、外国語学部、人文・教養・人間科学部、教育・教員養成系学部、法学部、経済・経営・商学部、社会・社会福祉学部、国際関係学部系統

理系＝理学部、工学部、農・獣医畜産・水産学部、医学部、歯学部、薬学部、看護・医療・栄養学部系統

## ●同じ学部系統でも、分野によって学費は大きく異なる

ここでひとつ注意したいのが、前ページの表は18の「学部系統」別の学費平均額だということ。

旺文社では、学部系統をさらに細かく70の「分野」に分類している。分野別に学費平均額を見てみると、ひとつの学部系統のなかでも、大きく異なるものがある。たとえば、私立大の「農・獣医畜産・水産学部系統」を見てみよう。同系統でも、「獣医学」と「畜産学・動物学」の初年度納入金平均額には約64万円の開きがあるのだ。

次のページに、公立・私立大別、分野別の、初年度納入金平均額を掲載した。より詳細に学費を知りたい方は、こちらも併せてご覧いただくのがよいだろう。



学費を調べる時、授業料などの一項目だけを見て、「高い」「低い」と判断しがちだ。しかし、実は、授業料には含まれていない必要経費がほかにもあり、“学費”と思っていたものが実際には、必要な金額と大きく異なっていることもある。ひとつの項目で判断せず、初年度納入金全体をしっかりと確認することが大切だ。また、初年度納入金全体が高かったとしても、その理由が少人数教育だったり、施設・設備が充実していたりする場合も十分にあり得る。教育内容と比較し、その金額が妥当かどうか、考えてみることも必要だ。

なお、これまで述べてきたことはあくまで学費の平均額についてであり、個々の大学の実際の学費については、『螢雪時代8月臨時増刊』をご参照いただきたい。

(2019.10 阿部)

